

土間座をつくる

2013年後期～2014年

室内空間は、壁や天井とともに、床のあり方によって規定される。材木を買って板敷きにする選択肢はなく、土間をつくることにした。

だが多数人数だと座りにくい。それで床を30cmほど掘下げ、そこに腰かけという方向が決まった。地面に座ることを「土座」ともいうが、われわれは地面そのものを椅子にするので意味が異なる。他に例がないので、仮に「土間座(どまご)」と呼んでおく。

2013年秋、この異例の「土間座」制作にとりかかった。

1_2013年10～11月
座の位置や方向を決めて地面を掘る

2_2013年10月～2014年2月
崩れを防ぐため、日干しレンガをつかって側壁を固める。

3_2014年2～3月
囲炉裏をつくる

4_2013年秋～冬
三和土(たたき)の研究
～研修・見学・実習

5_2014年春～冬
三和土による土間づくり



2013/10/17

室内を空っぽにして掘り始める。平らな床の見納め。



2013/10/17



2013/10/17



2013/10/24

陶磁器専攻の学生(高江洲佳乃)はツルハシの使い方もうまい。掘って出た土は日干しレンガに再利用する。



2013/10/24

鉄杭を打ちこんで柱の基礎を補強する長谷川先生



2013/11/14

掘った法面をできるだけ垂直にする。



固まった土を砕く。使う土は、アクアカフェで用いた大藪家の土塀の土、それに今回室内の地面を掘って出した土を混ぜる。



土をフルイにかける。土塗りの場合は念入りに粒をそるえるが、レンガづくりの場合は多少小石が混ざっていてもかまわない。

床の掘り下げと並行して、掘った法面の崩れを防ぐ側壁用の日干しレンガづくりに取り組む。

土塗りと日干しレンガづくりは、初参加の学生にとって、土の選択から粉碎、篩かけ、練り、左官、型取りなど、土の来歴となまの土の扱いに慣れる二系統の基本作業である。



土練り機で、土塀の土と床を掘って出た土(真砂土に近い)を混ぜて捏ねる。両者の比率は1:1。スサを入れて捏ね終わった土を型枠に移す。



2x4の廃材でつくった型枠にぴったりの押し板をつくって、土をしっかり押し込む。木づちでたたき込んでよい。

だが同じ作業でも、素材や人の状況が少しずつ変わり、使用目的も変わる。職人技術の単純な反復ではなく、新たな提案や工夫を取り入れ、技術や内容も少しずつ更新していく。今回つくる日干しレンガは意匠性を重視する。久住章さんに教えていただいた伝統の動的なあり方を実践するのである。



土ブロックを型枠から抜くには、型枠の角を敷き板に打ち付け、その振動で隙間を空けて抜いていくのが効率的だ。レンガ一個の大きさは、115x215x85mm。



慣れてくるとピッチが上がり、一日で50個できた。だが、側壁を全部レンガで固めるには、この倍以上が必要。



日干しレンガを並べ始める。レンガは斜め積みするので、それを受けるために、カーブの一番きつところから固定し始め、両側に広げていく。



レンガどうしを接着する際は、レンガを水でよく濡らし、土を水でゆるく練って糊状にしたもの(土ポンド)をたっぷり塗る。赤土を使って目地を目立たせる。

土間座のレンガは、側壁の意匠性を高めるために、ただ縦横に積むのではなく、斜めに組む。また、レンガのつなぎに色味異なる赤土とスサをこねたものを使い、目地を目立たせる。

レンガを置く前に、傾斜面をできるだけ垂直に掘り下げ、レンガがびったり壁に沿うようにする。



1_カーブの頂点にまっすぐ立てた七つの煉瓦が、左右からの斜め積みのレンガを受けとめる。



2_壁を削る→土ポンドを練る→レンガを積む。これを婉々と繰り返す。



3_一段目が終わったら二段目を積んでいく。レンガどうしを斜めにししっかり接着するため、木づちで打ちこむ。



4_入口側から下り階段をつくる。三段階段で、石は彫刻棟から捨て石を運んでくる。びったり来るものがないかなかなか、試行錯誤を繰り返す。



5_作業量が多く、年を越して、ようやくレンガ斜め積みの側壁ができた。



レンガの成分の半分は、掘り下げた地面と同じ土であり、あと半分は、大藪家の土塀＝アクアカフェの土である。素材は混ぜり合って循環する。



位置を決める。形は正八角形。



泥でつなぎ固めていく。

囲炉裏をつくる

2014/2/20(木)

芸大が入試期間に突入する直前、側壁づくりで余った日干しレンガを利用して、有志で囲炉裏づくりに取り組む。

高橋めぐみ(日本画3回生)の提案で、3月7日(金)に囲炉裏会を開き、土間座の効果を確かめた。

日本古来の住居は、北方由来の竪穴式(土間)と、南方由来の高床式(板敷)がある。椅子座の形式を土間に取り込んだ土間座は、そのどちらでもない。

周囲の床の^{たたき}三和土はまだだが、10人以上が腰かけることのできる土間座は、つちのいえの内部を、新たなコミュニケーションの空間に変貌させた。



2014/2/20



2014/4/25

2014年度春、新歓として囲炉裏会を開く。



壁の竹筒に桜の枝を差し込み、ベンチを仕立てる。

つちのいえに覆いかぶさるように桜が枝を広げていた。屋根に葉を落とすので、一部の枝を切った。その枝を壁に嵌め込んだ竹筒の穴に差し込み、長イスに仕立てた。

この枝ベンチも、囲炉裏付きの土間座とともに、つちのいえの居住性を高めるのに役立った。

たたき 三和土の研究

2013年秋～冬

三和土は、良質の土・消石灰・にがりの三種類をまぜて叩き固める方法をいう。土間をこの三和土で仕上げるのが決まるが、誰も三和土の実際のやり方を知らない。

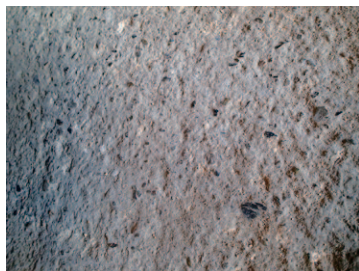
昔の農家や町屋に土間があるが、維持管理に手間がかかるので、今は多くにセメント使われ、真性の三和土土間を見ることがむずかしい。

幸い何度か見学に行った待庵（利休作・国宝）近くにある大山崎町歴史資料館の寺嶋千春さんから、見学可能な土間のある文化財や、三和土や土壁に詳しい「しっくい浅原」の浅原雄三さんをご紹介いただいた。

10月初め、さっそく浅原さんに連絡をとり、山科の工房を訪れた。色土の見本や版築見本が置いてある。探求心旺盛な方で、つちのいえの取り組みに共感下さった。三和土には深草の土がいいとのことだが、大藪家の江戸時代の土塀の土を持参すると、にがりや消石灰を混ぜなくても土だけで固まるのでは、と衝撃的なお話。現場指導に来ていただけることになった。



特別に見学させていただいたのは、長岡京市にある国登録有形文化財の民家・佐藤家住宅。佐藤家住宅は、近代初期の乙訓地域の代表的な大型農家で、文化4（1807）年建造の土蔵をはじめ、善峯寺旧庫裏の部材を転用したとされる明治初期の主屋、急斜面を利用した立体的な庭園、彫刻が見事な竹の節欄間など、格式ある構えが特徴。



佐藤家玄関先の土間が古来の三和土だった。灰白色の荒れた地肌は、一見するとコンクリートに見えるが、表面の下はすぐ土で、何度も帯で洗い出しているうちにこうなったとのこと。斜めの光を浴びたときの凹凸の陰影が美しく、周囲の重厚な雰囲気とマッチしていた。



持参下さった「たたき鍬」を採寸しておいた。



ちょうど土間座制作中で、「たたき鍬」を用いて、たたき方を教えて下さった。側壁のレンガを斜めに組むのも、浅原さんの示唆による。

宇治上神社拝殿 三和土土間の修復見学

しっくい浅原は、宇治上神社拝殿の三和土土間の修復を手がけておられ、見学に伺う(2013年12月4日)。

宇治川東岸の朝日山の山裾にある宇治上神社は世界文化遺産であり、本殿は日本最古の神社建築(平安後期)として、鎌倉期の拝殿とともに国宝になっている。

作業は最終段階で、残すは拝殿正面の土間のみとなっていた。



一同、職人さんたちの作業に見入る。一輪車にはふんわりとした土。深草土に生石灰とにがりを混ぜている。



前日に叩いた部分につなぐ部分。土を入れる前に水で湿らせる。



土を入れる。仕切りを使って、前日の三和土部分に混ざらないようにしている。



前日たたいた部分の端をげんのうでつぶして、新しくつけ加える部分となじみやすくする。



当て木を使ってたたく。不均等にならないよう、二人並んで、作業線が並行に進む。



木製のたたき鏝で叩く。道具はつからないといけない。



仕上げは金物のたたき鏝で。



縁の処理も精妙だった。

-->動画

https://www.youtube.com/watch?v=-hxwlvloJl_4

つちのいえでは、左官の久住章さん、茅葺きの斎藤親方、しっくい浅原の浅原雄三さんはじめ、当代一流の職人さんに直接教えていただけることがなんともありがたい。

三和土の土間をつくる

2014年

2014年度も引き続き、新メンバーとともに土間の三和土に取り組んだ。つちのいえを建てている円形基壇の内側の地面にバラス層があり、おそらくキャンパス造成当初は、水はけをよくして花壇にする計画だったと思われる。

三和土は下地が堅くないとできないので、そのバラスの層を削り取らなければならない。

バラス層は厚さが不均等で、こそげると地面が凹凸になった。

三和土に使う土は、江戸時代につくられた大藪家の土塀の土。古く細かくなった繊維分がふんだんに含まれ、アクアカフェに利用した際も、粘着力や硬化力が抜群だった。しっくい浅原の浅原さんから、にがりや消石灰を混ぜなくてもいいのでは、とアドバイスいただいたので、そのまま使うことにした。代わりに砂をまぜ、水を噴霧しながらたたき締める。伝統技術を応用変形するつちのいえらしい特異な三和土を試みる。



バラス層をこそげると凹凸があらわになった。



下迫良輔（漆工・院生）がたたき鏡を手づくり。



入口付近は特にバラスが厚く堆積していて、こそげると凹凸が激しい。三和土は二層にする。



2014/7/3

版築壁の前の部分。表面が見違えるようにきれいになっていく。



2014/12/13

東側の出口部分の三和土。下地に凹凸があるので、厚さが必要になる。



2014/12/13

三和土の層の縁はレンガで土留め。



2014/12/14



2014/12/18

三和土は手でたたき締めるので、一気に広い面積をつくることはできない。約40～50cmずつ進めていくので、時間がかかる。

ほかのさまざまな作業のためにいったん中断し、2014年12月に再開した。年末の囲炉裏会まで仕上げるべく、土日も有志で作業を進めた。

途中で土塀の土が足りなくなり、大藪家の屋敷の壁土も使う。ひび割れが出てくることは否めない。

12月15日 ようやく土間の三和土仕上げができた。

土間と対比的に、土間座の中にバラスを敷き詰めた。バラスは、アクアカフェの床に敷き詰めたものの再利用である。



2014/12/25